

大学生の対人関係は アイデンティティによって規定されるか ——愛着スタイルとアイデンティティ・ステータスの関連から——

柴 田 康 順

問題と目的

大学の学生相談に携わっていると、大学生の多くが他者とのかかわりの中で自分らしくふるまうことに関する悩みを抱えているように感じる。桐山（2011）は、昨今の大学生は自己肯定感や他者を信頼する力、感情、考える力、言語能力、コミュニケーション能力などが、青年期後期にふさわしい程度に育っていないことが多く、心理的に健康に見える大学生の中にも「いかに生きるか」という青年期的な悩みを抱える人が少なくないと述べている。

青年期の中心的なテーマとして注目されることの多い概念としてアイデンティティ（Ego identity）が挙げられる。Erikson（1950; 西平・中島, 2011）はアイデンティティを時間軸と空間軸から捉え、アイデンティティの感覚とは“自分自身の内部の斉一性と連続性”が“他人にとってその人がもつ意味の斉一性と連続性”と調和するという確信から発生するものであり、アイデンティティの感覚を真に得ることがアイデンティティ達成であると述べている。一方、アイデンティティの感覚を得られない葛藤からアイデンティティは拡散の危機を迎え、このような青年はアイデンティティ拡散を防衛するために集団に過剰に同一化し、他者に対して非常に排他的で不寛容になる傾向があるとされる。Erikson（1950）は自分のアイデンティティに確信が持てない場合、対人的な親密さを怖がって尻込みするが、自分自身に自信を持つようになると親密さを探し求めるようになると述べ、アイデン

ティティと親密性の関連について指摘している。しかし、日本の大学生の多くは対人関係に悩みを抱えながらも、表面上は対人関係において問題が顕在化していないことがほとんどである。そのため、対人関係に悩む大学生は他者とのかかわりをどのように体験しているのか、という観点からアイデンティティを評価することが必要であり、それによって対人関係において深刻な不適応状態に陥るのを予防することが大学生を支援するにあたって求められる。

Erikson によるアイデンティティの概念は抽象的で多義的であり、実証的に研究することが難しいとされるが、Marcia (1966) によるアイデンティティ・ステータス（以下、ステータス）アプローチは、アイデンティティの確立という発達課題に対して、危機（crisis）と自己投入（commitment）の有無によって実証的に検討しうる方法論として評価されており（樫場, 2007）、個人のアイデンティティの発達プロセスを段階的に理解するのに有効なアプローチであるとされている（永田・岡本, 2008）。各ステータスの特徴について無藤（1979）は次のように説明している。アイデンティティ達成は幼児期からのあり方について確信がなくなり、いくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している状態である。早期完了は自分の目標と親の目標の間に不協和がなく、どんな体験も幼児期以来の信念を補強するだけになっている状態である。モラトリウムはいくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している状態である。アイデンティティ拡散は2種類あり、危機前拡散は今まで本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像することが不可能であり、危機後拡散は全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない状態である。また、青年期のアイデンティティ発達の特徴として、危機は自分自身に対する違和感（小沢, 2004）や、自分と他者、社会とのズレ（西平, 1993）の自覚として体験されることや、現在の自分にとって将来が重要な意味を持つことなどが指摘されている（杉村, 2003）。鈴木・長江（2012）によると、アイデンティティを確立している人は他者への基本的信頼や自尊心、コミュニケーション能力などの社会的スキルが高く、自己中心化傾向が低い一方で、アイデンティティ

が確立されていない人は基本的信頼や対人的信頼が低い傾向にあり、自我の確立には他者とのかかわりの中で内面的な自己を表現することが重要であるとされている。

ところで, Erikson (1950) は自己完結的な自己は存在せず, アイデンティティは他者との関係の中で形成されることを重視していたことから, 近年ではアイデンティティを個体化の次元のみでなく, 関係性の文脈から捉え直そうとする試みも増加している (岡本, 2002 など)。岡本 (2002) によると関係性にもとづくアイデンティティの中心的テーマは, 「自分は誰のために存在するのか」「自分は誰の役に立つのか」ということであり, 他者の成長や自己実現への援助に向けて方向づけられたものであるとされる。関係性にもとづくアイデンティティの状態を質問紙法によって測定しようという試みもいくつかなされている (山田・岡本, 2008 など)。山田ら (2008) は, 対人関係のあり方においてアイデンティティの「個」の側面は自他の融合感の少なさと幅広い他者との関係を求める傾向として表れるのに対して, 「関係性」の側面は他者と自己とは独立した存在として認識され, 親密な関係を求める傾向として表れると述べているが, 数量的な分析によってアイデンティティを「個」と「関係性」に明確に区分することは難しいとしている。

これに関連して, 萩原 (2013) は関係性にもとづくアイデンティティ発達の特徴を踏まえ, 青年期のアイデンティティの問題において愛着理論を導入することの有効性を指摘している。愛着 (Attachment) とは人生早期に形成され, 生涯にわたって発展し, 人間の発達を促進するものであるとされる (Bowlby, 1969)。人は幼児期に主要な愛着対象との間で経験された相互作用を通して, 自分の周囲の世界や自己および他者に関する心的表象である内的作業モデル (Internal Working Models) を形成する。そして, 内的作業モデルに従って現実の出来事に対する認識や行動を起こす際の結果の予測が無意識的になされる。このような内的作業モデルにもとづく典型的な行動パターンは愛着スタイルと呼ばれ, Ainsworth et al. (1978) による幼児期の愛着スタイル研究や, 愛着スタイルという概念を青年や成人に適用した Hazan & Shaver (1987) の研究へと踏襲されている。Bartholomew & Horowitz (1991) は愛着行動の継続性にとって内的作業モデルが重要な役

割を果たすことに注目し、青年期においても自己および他者への期待や信念という2つの作業モデル（愛着の2次元）が存在し、その2つの次元によって青年や成人の愛着スタイルは安定型（secure）、拒絶型（dismissing）、とらわれ型（preoccupied）、恐れ型（fearful）の4つに分類することができるとした。これらの次元は自己および他者への期待や信念を表すものであることから自己観（自己に関する内的作業モデル）、他者観（他者に関する内的作業モデル）と呼ばれ、Brennan et al. (1998) によって自己観の高さは「見捨てられ不安」の低さとして、他者観の高さは「親密性の回避」の低さとして理解されうることが確認されている。

各愛着スタイルの特徴について中尾・加藤（2006）は以下のように説明している。安定型は、主観的安全感を直接的に表現しやすく、他者の反応や状況を適度に考慮しながら愛着行動を継続させることができる。拒絶型は、他者との相互作用を回避し、他者の反応や状況にかかわらず継続して相互作用を回避する。とらわれ型は、主観的安全感を直接的に表現するが、他者の反応や状況が異なると愛着行動に対して必要以上の自己制御を行ってしまう。恐れ型は、他者の反応や状況によっては愛着行動を行おうとしながら、結果的に愛着行動を抑制してしまう。

愛着スタイルの各次元と自己意識や精神的健康状態などとの関連について検討している研究はこれまでもなされている。たとえば、金政・大坊（2003）は大学生を対象として、愛着スタイルと社会的適応性の関連について調査を行い、「見捨てられ不安」が高いほど精神的健康状態は悪く、親密な関係における自己確信が持てない一方で、「親密性の回避」が高いほど自分を肯定的に捉えることができず、両者はそれぞれ自己に対して異なる影響を与えていることを見出している。

アイデンティティと愛着スタイルの関連については、愛着の安定性とアイデンティティ達成が関連していることを指摘する研究がいくつか見られるものの（Kroger, 1996; Lapsley et al., 1989）、それほど多くは検討されていないのが現状である。以上のことから本研究では、大学生が対人関係をどのように体験しているのかを測定するために愛着スタイルに注目し、その人の対人関係のあり方がアイデンティティによって規定されるものであるかどうか

を検討する。そして、対人関係におけるどのような特徴がアイデンティティの問題とかかわりが深いのか検討することで、対人関係の特徴に応じた支援のあり方について考察することを目的とする。

ところで、ステイタスも愛着スタイルも対象を既存のタイプに分類する類型論的な発想によるものである。ステイタスアプローチに関しては批判もあり、その批判の多くはステイタスが類型論的な発想にもとづいた評価方法であるところに起因している（高橋，1984；谷，2001 など）。八木（1994）によると、類型論は厳密に測定することではなく、直感的に理解できることを重視するため、体系だっていなかったりどの類型にも属さない中間の型が無視されやすいなどの問題があるとされる。一方で、特性論は測定値のパターンの違いとして把握するため、信頼性と妥当性をもってパーソナリティを構成する特性が同定され、その諸特性の客観的測定によって個人を捉える場合には、特性論は類型論における単純化を免れた優れたものであるとされている（八木，1994）。これに対して、中尾（2012）は愛着スタイルを捉える上では個々の愛着行動ではなくさまざまな文脈で現れた愛着行動全体を捉える見方が必要であり、そのためには類型論的立場が重要であるとしている。こうした指摘を受け、本研究ではステイタスと愛着スタイルの関連について、特性論的な観点から要素間の潜在的な関連について考察し、類型論的な観点からアイデンティティの状態と対人関係パターンとの関連について考察する。

方法

分析対象者 都内の4年制私立大学において385名に質問紙への回答を依頼した。回収した質問紙のうち、回答に不備のない371名（男性130名、女性241名；1年生43名、2年生94名、3年生184名、4年生50名；有効回答率96.4%）分の質問紙をデータ分析の対象とした。平均年齢は20.5歳（SD=1.183, 18～26歳）であった。

調査時期・調査方法 調査時期は2015年10月下旬から11月上旬であっ

た。調査は講義の一部を利用して行い、回答の際には調査協力における匿名性が確保されること、調査協力は任意であり拒否することができることを質問紙の表紙に明記し、同時に口頭で説明する形で行った。

質問紙の構成 『同一性地位判別尺度（加藤，1983）』、『一般他者版親密な対人関係体験尺度（中尾・加藤，2004）』を使用した。

（1）同一性地位判別尺度

同一性地位判別尺度は、対象者のステイタスを質問紙によって測定するために加藤（1983）が作成したものである。「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」（各4項目、計12項目）の3つの下位尺度から構成されており、「全然そうではない（1点）」から「まったくそのとおりだ（6点）」までの6件法で回答を求めた。

同一性地位判別尺度の下位尺度の得点の組み合わせによってステイタスは、1）同一性達成地位（以下、「達成」）、2）同一性達成－権威受容中間地位（以下、「AF」）、3）権威受容地位（以下、「権威」）、4）積極的モラトリアム地位（以下、「モラトリアム」）、5）同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位（以下、「DM」）、6）同一性拡散地位（以下、「拡散」）の6つの類型に分類することができる（加藤，1983）。本研究においても加藤（1983）の類型化の基準に従って、対象者のステイタスの分類を行った。

（2）一般他者版親密な対人関係体験尺度

一般他者版親密な対人関係体験尺度は、Brennan et al.（1998）が恋人との関係に基づいて愛着スタイルを測定するために開発した『親密な対人関係体験尺度（the Experiences in Close Relationships inventory）』の項目の表現を、中尾・加藤（2004）が恋人から一般他者を対象としたものに修正したものであり、従来の愛着スタイル尺度との関連から妥当性が確認されている。「見捨てられ不安（18項目）」「親密性の回避（12項目）」の2つの下位尺度から構成されており、「全く当てはまらない（1点）」から「非常によく当てはまる（7点）」までの7件法で回答を求めた。

愛着スタイルの類型に関して、中尾・加藤（2004）は一般他者版親密な対人関係体験尺度の下位尺度得点の高低によって4分類することができるとしている。本研究でも中尾・加藤（2004）の分類方法に従い、「見捨てら

れ不安」得点と「親密性の回避」得点の平均を基準として、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」がともに低いものを「安定型」,「見捨てられ不安」が低く「親密性の回避」が高いものを「拒絶型」,「見捨てられ不安」が高く「親密性の回避」が低いものを「とらわれ型」,「見捨てられ不安」と「親密性の回避」がともに高い「恐れ型」に対象者を分類した。

結果

アイデンティティ・ステイタスおよび愛着スタイルの下位尺度間の関連

各尺度の下位尺度得点の記述統計量を算出したところ、いずれの下位尺度得点においても分布の偏りに問題はなかった(表1)。そこで、各尺度の下位尺度得点間の相関係数を算出したところ(表2)、「現在の自己投入」得点と「見捨てられ不安」得点($r = -.207, p < .05$),「親密性の回避」得点($r = -.278, p < .01$)の間、「将来の自己投入の希求」得点と「見捨てられ不安」得点($r = -.148, p < .01$),「親密性の回避」得点($r = -.214, p < .01$)の間に有意な負の相関が認められた。「過去の危機」得点については「見捨てられ不安」得点の間には有意な正の相関が認められたものの($r = .146, p < .01$),「親密性の回避」得点の間には有意な相関が認められなかった($r = .094, n.s.$)。

次に、対人関係に表れる愛着スタイルの背景にどのようなアイデンティティが想定されるか検討するために、同一性地位判別尺度の下位尺度得点を説明変数、一般他者版親密な対人関係体験尺度の下位尺度得点を目的変数と

表1 各得点の記述統計量

		平均値	標準偏差	歪度	尖度	最小値	最大値
同一性地位判別尺度	現在の自己投入	15.21	4.38	-.22	-.25	4	24
	過去の危機	16.97	3.21	.12	-.26	8	24
	将来の自己投入の希求	15.27	3.28	-.41	.65	4	24
一般他者版親密な対人関係体験尺度	見捨てられ不安	67.69	19.29	-.08	-.16	18	119
	親密性の回避	47.87	12.08	.04	.01	15	84

大学生の対人関係はアイデンティティによって規定されるか

八

表 2 各得点の相関係数

	同一性地位判別尺度			一般他者版親密な対人関係体験尺度	
	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求	見捨てられ不安	親密性の回避
現在の自己投入	—				
過去の危機	.214 **	—			
将来の自己投入の希求	.574 **	.373 **	—		
見捨てられ不安	-.207 **	.146 **	-.148 **	—	
親密性の回避	-.278 **	.094	-.214 **	.071	—

** $p < .01$

表 3 重回帰分析の結果（説明変数：同一性地位判別尺度，目的変数：一般他者版親密な対人関係体験尺度）

	<i>B</i>	<i>SE B</i>	<i>β</i>	<i>t</i>	<i>R</i> ²
見捨てられ不安					
Step 1					
現在の自己投入	-.912	.224	-.207	-4.069 **	.043 **
Step 2					
現在の自己投入	-1.099	.225	-.250	-4.882 **	.081 **
過去の危機	1.195	.307	.199	3.891 **	
Step 3					
現在の自己投入	-.803	.267	-.182	-3.003 **	.091 **
過去の危機	1.400	.322	.233	4.347 **	
将来の自己投入の希求	-.764	.376	-.130	-2.031 *	
親密性の回避					
Step 1					
現在の自己投入	-.766	.138	-.278	-5.554 **	.077 **
Step 2					
現在の自己投入	-.860	.139	-.312	-6.171 **	.102 **
過去の危機	.604	.190	.161	3.175 **	
Step 3					
現在の自己投入	-.637	.165	-.231	-3.856 **	.117 **
過去の危機	.758	.199	.202	3.812 **	
将来の自己投入の希求	-.577	.232	-.157	-2.483 *	
					** <i>p</i> <.01 * <i>p</i> <.05

した重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表3）。その結果、「見捨てられ不安」得点に対して「現在の自己投入」得点（ $\beta = -.182, p < .01$ ）, 「過去の危機」得点（ $\beta = .233, p < .01$ ）, 「将来の自己投入の希求」得点（ $\beta = -.130, p < .05$ ）からの標準偏回帰係数が予測に有意であり, 「親密性の回避」得点に対しても「現在の自己投入」得点（ $\beta = -.231, p < .01$ ）, 「過去の危機」得点（ $\beta = .202, p < .01$ ）, 「将来の自己投入の希求」得点（ $\beta = -.157, p < .05$ ）からの標準偏回帰係数が予測に有意であった。

アイデンティティ・ステイタスと愛着スタイルの関連

ステイタスと愛着スタイルの連関について χ^2 検定を行ったところ, 両者の間には有意な連関が示された（ $\chi^2=43.563, df=15, p < .01$ ）（表4）。さらに残差分析をしたところ, 「安定型」では「達成」と「AF」の割合が有意に多かった。また, 有意傾向ではあるが「権威」の割合が多く, 「拡散」の割合は少なかった。「とらわれ型」では「DM」の割合が有意に多く, 「拡散」の割合が有意に少なかった。「恐れ型」では「拡散」の割合が有意に多く, 「AF」の割合が有意に少なかった。

「拡散」の割合が少なかった「安定型」と「とらわれ型」はともに「親密性の回避」得点低群であり, 反対に「拡散」の割合が多かった「恐れ型」は「親密性の回避」得点高群であったことから, 「親密性の回避」得点の高さが「拡散」と関連がある可能性が考えられた。一方で, 「見捨てられ不安」得点とステイタスの関連については明確な関連が見られなかったため, 愛着スタイルの各得点の高低がステイタスとどのように関連しているか調べるために再度 χ^2 検定を行った。その結果, 「見捨てられ不安」得点（ $\chi^2=13.515, df=5, p < .05$ ）, 「親密性の回避」得点（ $\chi^2=20.046, df=5, p < .01$ ）ともにステイタスと有意な連関が示された（表5）。残差分析の結果, 「見捨てられ不安」得点低群において「達成」と「AF」の割合が多く, 「親密性の回避」得点低群において「AF」の割合が多く, 「親密性の回避」得点高群において「拡散」の割合が多かった。

表4 アイデンティティ・ステイタスと愛着スタイルのクロス集計表

			アイデンティティ・ステイタス分類						
			達成	AF	権威	モラトリアム	DM	拡散	合計
愛着スタイル類型	安定型	度数	9	16	3	1	48	11	88
		(%)	10.23	18.18	3.41	1.14	54.55	12.50	
		調整済み残差	2.123*	3.214**	1.920†	-1.486	-1.464	-1.683†	
	拒絶型	度数	7	7	1	6	59	18	98
		(%)	7.14	7.14	1.02	6.12	60.20	18.37	
		調整済み残差	.740	-.905	-.328	1.423	-.233	-.069	
	とらわれ型	度数	2	9	1	5	62	9	88
		(%)	2.27	10.23	1.14	5.68	70.45	10.23	
		調整済み残差	-1.575	.292	-.197	1.076	2.043*	-2.311*	
	恐れ型	度数	3	3	0	2	58	31	97
		(%)	3.09	3.09	.00	2.06	59.79	31.96	
		調整済み残差	-1.273	-2.486*	-1.339	-1.029	-.327	3.935**	
合計			21	35	5	14	227	69	371

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

表5 アイデンティティ・ステイタスと愛着スタイル各得点高低群のクロス集計表

			アイデンティティ・ステイタス分類						合計
			達成	AF	権威	モラトリアム	DM	拡散	
見捨てられ不安	低群	度数	16	23	4	7	107	29	186
		(%)	8.60	12.37	2.15	3.76	57.53	15.59	
		調整済み残差	2.459*	1.937†	1.345	-.010	-1.450	-1.493	
	高群	度数	5	12	1	7	120	40	185
		(%)	2.70	6.49	.54	3.78	64.86	21.62	
		調整済み残差	-2.459*	-1.937†	-1.345	.010	1.450	1.493	
	合計		21	35	5	14	227	69	371
親密性の回避	低群	度数	11	25	4	6	110	20	176
		(%)	6.25	14.20	2.27	3.41	62.50	11.36	
		調整済み残差	.467	2.987**	1.468	-.350	.493	-3.402**	
	高群	度数	10	10	1	8	117	49	195
		(%)	5.13	5.13	.51	4.10	60.00	25.13	
		調整済み残差	-.467	-2.987**	-1.468	.350	-.493	3.402**	
	合計		21	35	5	14	227	69	371

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

考察

アイデンティティ・ステイタスと愛着スタイルを構成する要素間の関連

本研究ではステイタスと愛着スタイルの関連について、まず特性論的な観点からステイタスの次元である「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」と愛着スタイルの次元である「見捨てられ不安」「親密性の回避」の関連について検討を行った。

尺度の下位尺度得点間の相関を調べた結果、現在の自己投入や将来の自己投入の希求の水準が高いほど、見捨てられ不安や親密性の回避は低く、過去の危機の水準が高いほど、見捨てられ不安は高いということが示された。また、ステイタスの各次元から愛着スタイルの各次元を予測するために重回帰分析を行ったところ、過去の危機から見捨てられ不安、親密性の回避に対して正の影響が見られた一方で、現在の自己投入および将来の自己投入の希求から見捨てられ不安、親密性の回避に対しては負の影響が見られた。このことから、過去に高い水準の危機を経験していると感じているほど見捨てられ不安も親密性の回避も高まる一方で、現在明確な目標に向けて努力していたり、将来的に自分が何かに打ち込めるだろうと感じていたりする人ほど、見捨てられ不安も親密性の回避も低減することが推測された。

過去の危機と見捨てられ不安、親密性の回避の関連について、単純相関係数と比べて標準偏相関係数の絶対値が大きくなっていることから、過去の危機はこれら2つの変数に対する抑制変数となっている可能性が示された。過去の危機の経験によって見捨てられ不安や親密性の回避が高められる一方で、現在の自己投入や将来の自己投入の希求の中にも過去の危機の経験が寄与している要素が含まれている可能性がある。しかしながら、この回帰モデルにおける重決定係数の大きさは十分であるとは言えず、見捨てられ不安や親密性の回避に対してはステイタスを規定する要因以外による影響を考慮する必要がある。

アイデンティティ・ステイタスと愛着スタイルの類型間の関連

次に、尺度得点を用いてステイタスと愛着スタイルを分類し、それぞれの

類型の関連について検討した。その結果、対象者のステイタスと愛着スタイルの間には有意な関連があり、見捨てられ不安と親密性の回避がともに低い安定型には、現在の自己投入の水準が高い達成、AF、権威の割合が多く、現在の自己投入も将来の自己投入の希求も低い拡散の割合は少なかった。また、見捨てられ不安が高く親密性の回避が低いとらわれ型には、現在の自己投入の水準が高くない類型の中でも、将来の自己投入の希求を中程度にしているDMの割合が多い一方で、将来の自己投入の希求も低い拡散の割合は少なかった。見捨てられ不安も親密性の回避も高い恐れ型には拡散の割合が多い一方で、AFの割合は少なかった。見捨てられ不安が低く親密性の回避が高い拒絶型についてはステイタスによる組み合わせの偏りが認められなかった。

愛着スタイルが安定型あるいはとらわれ型でステイタスが拡散に分類された人の割合が少ない一方で、恐れ型で拡散に分類された人の割合が多かった。安定型、とらわれ型はともに親密性の回避が低く、恐れ型は親密性の回避が高い群であることから、親密性の回避の高さが拡散とかかわりの深い要素であると思われた。一方で、とらわれ型、恐れ型はともに見捨てられ不安が高いが、拡散に分類された人の割合はとらわれ型では少なく恐れ型で多いことから、見捨てられ不安とステイタスとの間に明確な関連は見られなかった。このことを踏まえ、見捨てられ不安、親密性の回避の高低とステイタスの関連について調べたところ有意な関連が認められ、見捨てられ不安が低い人には達成やAFの割合が多く、親密性の回避が低い人にはAFの割合が多かった。また、親密性の回避が高い人には拡散の割合が多いという結果が得られ、親密性の回避の高さと拡散の間に関連があることが確認された。一方で、見捨てられ不安の高さと拡散の間には関連が認められず、見捨てられ不安が低いことと達成の間に関連が認められた。また、見捨てられ不安および親密性の回避が低いこととAFの間に関連が認められたものの、親密性の回避の低さと達成の間には有意な関連が認められなかったことから、見捨てられ不安の低さも親密性の回避の低さも現在の自己投入の高さと関連があるが、過去に高い水準で危機を経験していることで、特に親密性の回避が高まる可能性が示唆された。

岡本（2002）によると、アイデンティティの発達には、主体的に模索し、積極的に自己投入することによって促進されるが、本研究の結果は危機と自己投入はそれぞれが独立した経験を意味するのではなく、現在の自己投入の水準によって過去の危機が含む意味づけが変容するということを示唆するものである。内田（2014）は他者との関係において裏切られたり、傷ついたりするようなネガティブな体験をすることは愛着スタイルを不安定な方向に変容させる可能性がある」と指摘している。対象者にとって過去の危機が他者から選択の主体性を奪われるような体験として捉えられているのであれば、本研究の結果も内田（2014）と同様の結果であったと言える。しかしながら、見捨てられ不安も親密性の回避も低い安定型において高位のステータスに分類された人が多く分布していたことを考え合わせると、高い水準で自己投入を行っている現在の状況によって、過去の危機の経験は“重大な選択に迷った結果、主体的な自己選択を行った”という肯定的な意味に変容し、今の自分にとって必要な体験として解釈されるようになる可能性がある。

本研究のまとめと今後の展望

以上のことから、本研究の結果は以下のようにまとめられる。

- 1) 現在明確な目標が持てず、何かに打ち込むことができていないと感じており、将来的にも自分が何かに打ち込むことに期待が持てない人は、他者との親密な関係を避ける傾向がある。一方で、現在明確な目標を持ち、達成に向けて努力していると実感している人は、他者から見捨てられるのではないかと不安に感じる傾向がある。
- 2) 過去に重大な選択について思い悩んだ経験があると強く感じているほど、他者から見捨てられるのではないかと不安に思ったり、他者と親密な関係を築くことを避けたりする姿勢が強くなる傾向がある。一方で、過去に重大な選択について思い悩んだ経験があると強く感じている場合、現在明確な目標を持ち、その達成に向けて努力していると強く実感している場合、他者から見捨てられるのではないかと不安に思ったり、他者との親密な関係を避けたり

することは少ない。

本研究の結果から、親密な対人関係を築こうとしない大学生は、過去の危機の経験によって挫折し、無気力で否定的な自己イメージを強く持っているなどアイデンティティの問題を抱えている可能性がある。そのため、このような悩みを持つ大学生に対しては、自己のあり方を内省しながら現在の自分の役割や立ち位置について理解を深められるような心理的アプローチが不可欠であるが、対人関係のあり方を修正すべく社会的スキルを身につける場として集団療法を導入する際には慎重である必要がある。鑓（1979）は、「患者の主体性を侵さず、過度な干渉は控え、忍耐強く患者内部に熟してくるものを待ち続ける成人の態度こそ、はじめて他者と自己に対する『境界』を安心して受けとめ、その間における基本的信頼を獲得していく基礎となる」と述べている。親密な対人関係を築こうとしない大学生とかかわる際には、その人が1対1の人間関係を築くことすら難しいことを念頭に置き、継続的な個人療法においてまずは援助者との二者関係が構築されることが何よりも必要となる。そして、集団療法の併用などによって二者関係から三者関係へと展開していく際には、永山（2012）が指摘するように、集団の中で二者状況を作り出し、それを援助者が支えながら援助者以外の第三者との関係へと繋いでいくことで主体的な自己が育まれると考えられる。

本研究では、対象者のうち6割がDMに分類されたことから、大学生の多くは現在の自己投入も将来の自己投入の希求もある程度の水準でしており、クロス集計の結果DMかつとらわれ型が多いという結果が得られた。しかし、DMにおける愛着スタイルの分類のみを実数として見たとき、それほど差異があるとはいいがたい。したがって、本研究の知見を単純化して、観察される対人関係の様相からその人のアイデンティティが把握できると解釈するのは不適切である。桐山（2011）が指摘するように、昨今の大学生は心理的に健康に見えても実際には悩みを抱えていることが多く、必ずしも対人関係上の問題が表面化しているわけではない。しかし、アイデンティティの問題は特に他者との親密な関係を回避する心性として表れる可能性があるという知見は、心理臨床の場面において大学生をアセスメントする上で必要な視点であり、親密性を回避する傾向を理解した上で適切に対応することは、

その人が深刻な対人不適応に陥ることを予防するのに役立つと思われる。

また、過去の危機が見捨てられ不安や親密性の回避の抑制変数であるという統計分析の結果を根拠として論考してきたが、過去の危機に関して谷（2001）は自伝的記憶研究の立場からアイデンティティについて論じた研究を引用したうえで、『『危機』という変数は、過去の想起という不安定なものに依存するものであり、自我同一性の状態を類型化する変数としては、極めて不適切』と述べている。確かに、質問項目によって過去の自分のあり方について想起させた結果をその人の“客観的現実としての過去”と捉えることは不適切である。しかし、本研究の結果から導かれた知見は、心理社会的存在として自己を確立するために必要となる自己イメージを明確に持ち、その達成に向けて努力している現状について十分に実感していることこそが安定した対人関係の基盤にあるということである。そして、その現状に連なる形で過去の危機の経験が想起されるということであり、これは心理社会的自己の連続性に矛盾するものではないと思われる。ただし、過去の危機が現在の自己投入とどの程度の必然性をもって結びついたものなのか、また過去の危機が現在の自己投入との関係においてどのような価値を持つものとして捉えられているのか、といった変数同士の質的な結びつきについては本研究の結果から検討することができなかった。樫場（2007）によると、過去から現在のステイタスの移行は、アイデンティティの構造に「自己同一性→心理社会的同一性」という変化が生じているとされているため、過去の危機と現在の自己投入の関連については今後の検討課題である。

また、将来の自己投入の希求と現在の自己投入との関係については拡散の文脈で並列したのみで、十分に言及することができなかった。今後は現在の自己投入だけでなく、過去から将来へと連なる時間軸にも注目していくことが求められる。

参考文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation., Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991) . Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, pp.226-244.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998) . Self-report measurement of adult attachment: An integrate overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.) , *Attachment theory and close relationships* (pp.46-76) . New York: Guilford.
- Erikson, E. H. (1950) . Growth and Crises of the “Healthy Personality.” In *Symposium on the Healthy Personality, Supplement II ; Problems of Infancy and Childhood, Transactions of Fourth Conference, March, 1950*, M. J. E. Senn, ed. New York: Josiah Macy, Jr. Foundation. (エリク・H・エリクソン, 西平直・金島由恵 (訳) , 2011, 健康なパーソナリティの成長と危機, アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房, pp.45-110.)
- 萩原英敏 (2013) . 3 歳未満児保育から見た, 親子関係が, 青年期前後の人格形成に及ぼす影響について その 1. 精神分析学の流れをくむ, Bowlby の Attachment 理論や, Erikson の Life cycle 理論から見た保育問題, 淑徳短期大学研究紀要, 52, pp.43-60.
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1987) . Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, pp.511-524.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003) . 青年期の愛着スタイルと社会的適応性, 心理学研究, 74 (5) , pp.466-473.
- 加藤厚 (1983) . 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究, 31, pp.292-302.
- 榎場真知子 (2007) . 青年後期におけるアイデンティティの発達過程及びそれに関与する要因について, 青年心理学研究, 19, pp.51-68.
- 桐山雅子 (2011) . 学生相談室からみた大学生の発達の特徴, 平石賢二 (編著) , 改訂版 思春期・青年期のころこ一かかわりの中での発達, 北樹出版, pp.142-154.

- Kroger, J. (1996) . Identity in adolescence: The balance between self and other (2nd ed.) . London: Routledge.
- Lapsley, D. K., Rice, K., & Fitzgerald, D. P. (1989) . Adolescent attachment, identity, and adjustment to college: Implications for the continuity of adaptation hypothesis. *Journal of Counseling and Development*, 68, pp.561-565.
- Marcia, J. E. (1966) . Developmental and validation of ego identity status, *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, pp.551-558.
- 無藤清子 (1979) . 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性, *教育心理学研究*, 27 (3) , pp.28-37.
- 永田彰子・岡本祐子 (2008) . 重要な他者との関係を通して構築された関係性様態の特徴, *教育心理学研究*, 56, pp.149-159.
- 永山智之 (2012) . 個人療法と集団療法を併用した心理療法的アプローチの可能性—対人恐怖と発達障害を中心に—, *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 58, pp.247-259.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004) . “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討, *九州大学心理学研究*, 5, pp.19-27.
- 中尾達馬・加藤和生 (2006) . 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか?, *パーソナリティ研究*, 14 (3) , pp.281-292.
- 中尾達馬 (2012) . 成人のアタッチメント 愛着スタイルと行動パターン, ナカニシヤ出版.
- 西平直 (1993) . エリクソンの人間学, 東京大学出版会.
- 岡田努 (2010) . 青年期の友人関係と自己—現代青年の友人認知と自己, 世界思想社.
- 岡本祐子 (2002) . アイデンティティ生涯発達論の射程, ミネルヴァ書房.
- 小沢一仁 (2004) . 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと, *東京工芸大学工学部基礎教育研究センター*, 26 (2) , pp.64-75.
- 杉村和美 (2003) . アイデンティティ発達のメカニズムを検討する視点, *学生相談研究*, 24, pp.213-217.

- 鈴木貴美子・長江美代子(2012). 大学生の友人関係のあり方とアイデンティティの発達, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 7 (1), pp.133-144.
- 高橋裕行(1984). 自我同一性と Marcia の同一性地位面接—批判的展望, 教育心理学研究, 32 (4), pp.320-328.
- 谷冬彦(2001). アイデンティティ・ステイタス・パラダイムに対する批判的検討 (I) 基本的問題, 神戸大学発達科学部研究紀要, 9 (1), pp.31-39.
- 鑓幹八郎(1979). 「自我同一性」に関する若干の考察, 鑓幹八郎・上里一郎(編), シンポジウム青年期1 自我同一性の病理と臨床, ナカニシヤ出版, pp.5-27.
- 内田利広(2014). 内的作業モデルの児童期から青年期における変容—重要な他者という観点から—, 京都教育大学紀要, 125, pp.117-130.
- 八木保樹(1994). 類型論・特性論, 重野純(編), 心理学, 新曜社, pp.292-301.
- 山田みき・岡本祐子(2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ—対人関係の特徴の分析, 発達心理学研究, 19 (2), pp.108-120.